

氏名・（本籍地）	那波良晃（岡山県）
学位の種類	博士（仏教学）
学位記の番号	甲第115号
学位授与の日付	平成31年3月15日
学位論文題目	初期台密における仏頂尊とその周辺
論文審査委員	主査 塩入法道 副査 勝野隆広 副査 木内堯大 副査 大久保良峻

那波 良晃氏 学位請求論文審査報告書

「初期台密における仏頂尊とその周辺」

論文の内容の要旨（1200字以上）

本論文は、台密における仏頂尊に関する論考が主なテーマとなっている。論文は次のような目次で構成されている（「節」以下は略）。

序

第一部 初期台密における仏頂尊について—最澄及びその周辺を中心に—

第一章 入唐以前の最澄における仏頂尊理解—五仏頂法を中心に—

第二章 『内証仏法相承血脈譜』における仏頂尊の位置づけ

第三章 最澄帰国後における仏頂尊との関係—『灌頂七日行事鈔』を中心に—

第四章 薬雫撰『破邪弁正記』にみえる最澄の密教について

第五章 台密における『陀羅尼集経』の依用について—『息心抄』を中心に—

第二部 『瑜祇経』における仏頂尊に位置づけについて

第一章 従来の『瑜祇経』研究における仏頂尊との関係について

第二章 『瑜祇経』所説の「壞二乗心」について

第三章 青蓮院吉水蔵『瑜祇経母捺羅』『毘盧私記』『瑜祇経西決』について

翻刻資料

『瑜祇経母捺羅』

『毘盧私記』

『瑜祇経西決』

結

第一部の要旨は次の通りである。

第一章では、五仏頂法を中心に取り上げ、入唐以前の最澄の密教理解について論じている。『伝述一心戒文』にみえる円澄の五仏頂法修法については、その実施に関する問題点も指摘されているが、『延暦僧録』等に奈良時代に仏頂法に関わる事例が見られること、最澄や弟子の円澄とも関係する梵釈寺に住持した永忠が『五仏頂法決』なる書を著していること、また大仏頂に関しては、『首楞嚴経』の真偽論譯や仏頂行道の実施等、当時からすでに何らかの讃呪が修され、『台州録』に大仏頂に関する将来物が記されていることから、最澄は入唐以前から仏頂法に触れる機会を有していた可能性は高いと推察する。また、『守護国界章』によると、梵釈寺には鑑真将来の典籍等が備えられていたことが記されている。その中には、「画五頂像一舖」という菩提流志訳『一字仏頂輪王経』（または『五仏頂三昧陀羅尼経』）と関連するであろう五仏頂に関する図像が存する。これらは、梵釈寺に「画五頂像一舖」に関する図像が『五仏頂法決』と共に蔵されていたことを示唆する。最澄はこれらの典籍等を梵釈寺において修学していた可能性があり、桓武天皇の内供奉十禅師の一人であった最澄が自身の入唐中に円澄が行った五仏頂法を先に修法していたと考え

ても矛盾はないであろうと論じている。

第二章では、最澄の『内証仏法相承血脈譜』の中、二種の血脈譜「胎蔵金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」と「雜曼荼羅相承師師血脈譜」とを中心に、最澄が唐において受法した仏頂尊に関する密教について考察している。最澄は後に帰国した空海が将来した胎金の密教に接し、自分自身の密教理解の不足を自覚していたと考えられているが、入唐前から仏頂尊に何らかの関心を抱いていたことは、第一章で述べた伝記類等が示している。そして、入唐して仏頂尊に対する造詣を一層深めた最澄は、帰国後には、大日如来を主とする灌頂だけでなく、仏頂尊を主とする灌頂をも執行し、さらに自身が受法した仏頂尊を主とする密教を、胎金とは別箇のものとして系統化しようとし「雜曼荼羅相承師師血脈譜」を著したのではないかと、つまり最澄は胎金については空海に受法しなければならなかったにしても、仏頂尊を中心とする「雜曼荼羅相承師師血脈譜」に集約される密教は独自のものと自負していたと考えられると述べる。

さらに、「雜曼荼羅相承師師血脈譜」に見られる漢訳者の經典、つまり菩提流志訳『一字仏頂輪王經』、阿地瞿多訳『陀羅尼集經』と『蘇悉地經』とを俯瞰すると、中尊はいずれも仏頂尊であり、それぞれの中尊に関する説明に近似性があることが認められる。この点を考慮すれば、これらの經典の中に、蘇悉地の要素が含まれていると解することも可能であり、順暁より受法した「三部三昧耶の印信」だけでなく、仏頂尊を中心とする「雜曼荼羅相承師師血脈譜」に記された受法からも、最澄における密教の独自性が看取でき、入唐前よりすでに知見のあった仏頂法に関する知識をより深化させ展開させていったのだろうと論じている。

第三章では、最澄による高雄灌頂に関する書とも評される『灌頂七日行事鈔』の真疑の問題について検証している。『灌頂七日行事鈔』は、「胎蔵灌頂行事鈔」や「灌頂行事鈔」等の呼称を経て、現行の『伝教大師全集』に所収された形となる。その著者は「叡山集」とあって、古より「最澄撰」として扱われるものとされていた。しかし、円珍の私録である『山王院蔵書目録』や安然の『八家秘録』には本書に関連する書名を見出せない。義真記『修禪録』に『灌頂七日行事鈔』に類する書の名を確認できるものの、それは明らかに最澄の撰述と見做しえない書物も収められる「右外」に位置する。さらには『修禪録』は義真以降の人物の加筆が一部に認められるため、安易に本書が義真の時代に存在していたと考えることはできない。先学が真撰とした理由としては、「最澄撰」の拠り所として、薬僞の『破邪弁正記』の説が重要視されていたこと、そして「叡山集」即ち「最澄撰」という伝統および三書の『灌頂七日行事鈔』の奥書に記された引文の何れもが本書を最澄撰述であると述べていることなどが考えられる。なかでも、『破邪弁正記』の引文において、最澄が唐の順暁阿闍梨から次第を伝授された作法が『灌頂七日行事鈔』として、『大日經』『一行記』『蘇悉地經』『陀羅尼集經』等に基づいて集約されていることが大きな影響を与えたと思われるが、これほどの重要な作法が、円珍や安然に関係する目録に出てこないことには不審を覚えるとする。

第四章では、前章において『灌頂七日行事鈔』を最澄撰とするには問題があると論じたことをうけ、本書の成立に薬僞撰『破邪弁正記』が関係する可能性を考察している。『破邪弁正記』にみられる恵什の「最澄の高雄灌頂は蘇悉地法である」という疑義に対して、薬僞はいくつかの資料をもとに、最澄所伝の密教は両部であることを論証しようと努めた。五部灌頂を両部と見做している箇所が散見されるが、これは「最澄所伝の密教は両部の密教である」と当時は考えられていたので、薬僞もこれに従って、「両部灌頂行事鈔」（『灌頂七日行事鈔』と『金剛界灌頂行事鈔』）を最澄の撰著であるとしている。

しかし、この主張をそのまま首肯するには問題があるとし、それは「両部灌頂行事鈔」の名が、円珍や安然等の台密諸師の目録の中に確認されないこと、さらに薬僞自身、「両部灌頂行事鈔」の作法内容に関する知識を有していなかった等を挙げている。

また、「両部灌頂行事鈔」の一である『灌頂七日行事鈔』は、『陀羅尼集經』を基にした作法書であり、その『陀羅尼集經』の位置づけは、安然の説に準じているようにもみえ、その説は『破邪弁正記』の中にも登場する。従って『灌頂七日行事鈔』は、安然以降に成立したと推察している。さらに他の二、三の観点から『灌頂七日行事鈔』の成立について検討し、現段階では『灌頂七日行事鈔』を最澄撰と考えることは難しいとしながら、台密と仏頂尊との関わりを研究する上で、一つの貴重な資料となりえると結論している。

第五章では、『陀羅尼集經』に焦点を当て、その依用について調査を行っている。訳者である阿地瞿多は、唐においてすでに『陀羅尼集經』に関連する修法を行っていること、また奈良時代にすでに『陀羅尼集經』が多岐にわたって活用されていたこと等、その依用は確認できる。しかし、阿地瞿多の修法については、本人の伝記が乏しく、如何に修法を行っていたのかも不明である。奈良時代における依用についても、『陀羅尼集經』に関連する呪や呪法等の具体的な記録は乏し

く、その修法を密教修法として採り扱うことは妥当とはいえないと述べる。

台密においては、円仁や円珍は、自著の中で『陀羅尼集經』に説かれる文を引くが、その修法に関する記述は見出せない。また、両師に蘇悉地と相關する一字仏頂輪王に関する資料が遺されているが、『陀羅尼集經』と如何に連関するかを示した明確な資料等は見いだせず、それは安然に至っても同様であるとする。

安然以降の事相全盛期に至ると、『陀羅尼集經』はあらゆる修法に用いられるようになる。中でも長宴や相実の時代にあつては、台密における「釈迦四天王法」なる修法が、『陀羅尼集經』所説の修法に関する作法であることが『門葉記』『相実法印不伝此法事』等に記され、実際に行ったことが録されている。これらによれば、「釈迦四天王法」とは、釈迦仏頂を中尊とする『陀羅尼集經』『金輪仏頂像法』に同経所説の四天王惣印を附随させた作法であり、長宴が延久二年に、胎蔵曼荼羅の釈迦と『陀羅尼集經』の釈迦仏頂に纏わる修法とを結びつけた作法を実際に修したようである。このように、長宴の頃に至って、『陀羅尼集經』に関する明瞭な修法の記録が確認でき、「胎蔵灌頂行事鈔」とも称される『陀羅尼集經』を基盤とする『灌頂七日行事鈔』の成立とも関連するであろう資料を見出し得たと論じている。

しかし、相実は久安二年に至るまで、この修法の存在を知らなかったことが『門葉記』『相実法印不伝此法事』や、『息心抄』『四天王法』等に記述されている。さらに、『灌頂七日行事鈔』の名が初めてみられる天仁二年成立の薬雋『破邪弁正記』の頃には『灌頂七日行事鈔』は比叡山中に流布されていたにもかかわらず、相実は『灌頂七日行事鈔』について触れていない。『灌頂七日行事鈔』の具体的な成立を特定するには、本論において採り上げた『四十帖決』や『息心抄』等の事相全盛期初頭に位置づけられる文献をより詳細に整理し、検討していく必要があるとも述べている。

第二部では、『瑜祇經』に焦点を当てた論考が展開されている。

第一章では、台密における従来の『瑜祇經』研究における仏頂尊について先行研究の検討を行い、『瑜祇經』には、仏頂尊に關連する要素が随所に確認できることを論じている。それは、「一切如来金剛最勝義利堅固愛染王心品第二」に説かれる諸余の真言に対応する諸尊に、金剛界五部に加えて「仏頂部」を設けていること、「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六（四攝行品）」の品題に仏頂の名が冠されていること、「金剛吉祥大成就品第九」に仏頂尊の効能と関係の深い仏眼仏母に關する修法が説かれていること等である。先学の研究により、台密では『瑜祇經』中、「金剛吉祥大成就品第九」に説かれる仏母の身から『蘇悉地經』とも關連する一字頂輪王が化作されることや、胎金合糝を表す「大悲胎蔵八字真言」が説かれることから、「金剛吉祥大成就品第九」の重要性が指摘されている。しかし、他品に關する研究は未だ着手されていないと述べる。

第二章では、『瑜祇經』に説かれる仏頂尊について、品題に仏頂尊の名を冠する「四攝行品」に焦点を当てて論究している。「四攝行品」では、金剛手菩薩が、「一切処無不相応真言」を呪し、四攝行の想を起し、四種鉤を結び、一切の有情に利益と安樂を与える四攝の行法を説く、そして一切時において「壞二乗心」を起し、「壞二乗心真言」を誦することによって、福德増長、如来加護等の利益を得、現世において大金剛位処を証することができるといった内容が説かれている。台密において、初めて『瑜祇經』の註解を行ったのは安然である。その著作である『瑜祇經疏』においては、「壞二乗心」に關する記述が中心であり、「壞二乗心真言」にみられる「摩訶那囊」と「薩縛達摩尼秣弟」に焦点を当て、その意義が述べられている。そして、「摩訶那囊」を文殊、「薩縛達摩尼秣弟」を觀音に配当し、文殊の大智と觀音の大悲とを合して「壞二乗心」であるとの解釈がなされる。この文殊と觀音との関係は、台密の『瑜祇經』理解において重要視される仏頂尊と仏母としての仏眼との関係の類似性を想起させるが、「四攝行品」の中でその解釈が具体的にされることは無いという。

また、「壞二乗心」の真言については説かれているが、その印相について安然は全く触れていない。安然以降の台東両密諸師らの章疏類からその印相について探求すると、「壞二乗心」の印相は、それぞれの用途や目的から三つに大別することができる。それは、①愛染王法において用いられる金剛合掌、②穴太流系の記述にみつけることができる文殊劍としての扱われ方、③三昧や葉上両流系の「法華誦作法」にみられる觀音の種字を加える解釈である。②と③は、まさに『瑜祇經疏』より始まる解釈から発展したことがうかがえる。①については、真寂の『瑜祇總行私記』にその始まりを見ることができると論ずる。

第三章では、密教に關する多くの貴重な書物が保管されている青蓮院吉水蔵所収の『瑜祇經母捺羅』『摩訶蘇悉地私記』合綴本、並びに『瑜祇經西決』の三書について解析を行っている。これら

三本は、共に長寿房薬仁の記であり、嘉暦三年に基好の書本とされるものを書写したものが現存の三本と考えられるという。

『瑜祇経西決』に記された奥書によると、基好は伯耆の国の戦乱に巻き込まれ、大山の聖教類と共に自ら書写した本も多く消失したが、その後多武峰にて再び書写した旨が記されている。そのためか、これら三本はそれぞれに欠損箇所がいくつか確認でき、奥書も諸本それぞれに対応したものなのかどうか定かではなく、乱雑にまとまっている。しかし、これら三本に記された文を一同に集め展開し整合性を図ることで、幾分かを修復することができ、これら三本の密接な相互関連性が理解されたと述べる。

なお本論文には、上記の三本を復刻資料として付加している。三本をそのままの形式で翻刻を進めたが、今後の課題として、三本におけるバラバラになっている箇所のさらなる整理や校合を図り、また『瑜祇経母捺羅』における「壊二乗心印事」の件についてもさらに解析を進めたいとしている。

以上

審査結果の要旨 (1200字以上)

本論文は、初期台密の成立および台密の展開における重要な尊格の一つである仏頂尊について検証、考察したものである。台密は最澄に始まり、同じく入唐した円仁や円珍により充実がはかられ、その後、安然等により大成されてきた。台密の特色としては、胎藏界と金剛界の両部に蘇悉地を加えた三部立ての密教であることが挙げられる。特に蘇悉地は東密とは一線を画するものであり、仏頂尊と密接な関係にある。その仏頂尊に関して、三崎良周氏等の業績を踏まえつつ、最澄からの展開として捉え様々に論究し、さらに『陀羅尼集経』や『瑜祇経』等を取り上げ、仏頂尊との関連を調査し、今まであまり研究されていなかった領域における台密の実態の一端を解明しようと試みたものである。

全体として、現存している限りでの諸資料を丹念に読み込み、さほど多くはないとはいえ先行研究を丁寧に参照しながら、論を展開している点は評価できる。問題点としては、資料が少ないという限界もあろうが、推測で終わってしまったり、結論を想定してから論じていくという面も見られ、また意味を取る上で、必ずしも明瞭ではない表記が若干見られるところである。これらの点は口述でも指摘された通りである。

なお、本論のテーマに関しては、三崎氏による中国密教における仏頂系の密教に関する画期的研究や長部和雄氏の研究も参考になる点が多いので、再確認しておいた方がよかったと思われる。

第一部では、主に最澄の密教に関する知見や入唐時における密教受法、および仏頂尊に関する事例について論じている。これらについては当時の文献資料が少なく従来あまり研究されていないが、本論では残された資料をよく読み込んで検証しながら考察しているが、筆者の推論を出ない部分もある。

第一章は、最澄の入唐以前に遡る問題として、最澄と「五仏頂法」に関して考察しているが、三崎氏、水上文義氏を中心とした研究者が論じているところである。この点については従来の研究をきちんと踏まえていると言える。ただ円澄が五仏頂法を行ったという結論ありきで論を展開している感があり、口述でも指摘されたように、『伝述一心戒文』の文章に対する検討が不十分であるといえる。また明確な証拠がないにも関わらず、現存しない梵釈寺永忠『五仏頂法決』を最澄が参照していたと推論している点は問題であろう。なお第一章の第五節は画像について論ずるものであるが簡略であり、画像については、後世のものも含めもう少し検討を深めた方がよいと思われる。

第二章～第四章は、それぞれ最澄の立場を多角的に解明しようと試み、筆者による新しい着眼も提示したものと評価できるが、問題点もある。第二章では、『内証仏法相承血脈譜』を検討し、仏頂尊を中心とする「雑曼荼羅相承師師血脈譜」に記された受法からも、最澄における密教の独自性が看取でき、入唐前よりすでに知見のあった仏頂法に関する知識をより深化させ展開させていったのであろうと論じているが、この点については重要な問題をはらんでいるので、さらなる検証が必要である。第三章では、諸文献を精査し『灌頂七日行事鈔』が最澄撰であることに疑問を呈し、これを受けて第四章では、従来『破邪弁正記』の説を根拠に真撰とみなされてきた『灌頂七日行事鈔』について詳細な検討によって、偽撰説を提示している点は評価したい。

第五章では、『息心抄』に注目して『陀羅尼集経』の依用を論じているが、前章までの検討を基にした筆者独自の研究と言える。特に「釈迦四天王法」については、台密における仏頂尊の重要性を、本研究で一連のものとしたことに意義が認められる。ただし具体的内容が割愛されていることは、本論の第二部が事相に重きを置いていることから言えば少々物足りない感がある。若干の内容説明があってもよかった。

第二部は、蘇悉地法や仏頂尊と関係の深い『瑜祇経』に関して、時代は降るが安然等の著述を用いて検討し、最澄以来の台密の特色がどのように発展、拡充してきたかを考察している。研究の少ない台密における『瑜祇経』の依用について論じており、発展性がある課題を提示しているといえよう。

第一章では、三崎、水上両氏の研究を咀嚼し問題点を確認し、その上で第二章では「壞二乗心」という用語に着目し、筆者の見解を開陳する。新たな問題を探ったもので、研鑽の様子が窺える。特に「壞二乗心」の印相を三類とする点は筆者の独自な見解である。単純に三類を並記してよいかどうか、更に検討を深める必要があるだろうが、試論として十分に評価できるであろう。なお『瑜祇経』四摂行品における文殊と観音との関係が、仏頂尊と仏眼(仏母)の関係を想起させると述べているが、明確な証拠が見られない。またいわゆる『蓮華三昧経』を簡単に不空訳と記するというような基礎的な問題点も見られる。

第三章では、後に付される翻刻資料と直接に関係している。これらは事相関係であり、本論文全体における位置づけ等、必ずしも明瞭ではないところもあるが、台密研究において事相関係はあまり論じられていない現状にあって、密教事相をどのように研究していくかという課題に対して、一

つの方向を示すものとなっている。そこに取り組んでいる姿勢は評価できる。

最後に、青蓮院吉水蔵の『瑜祇経』に関する『瑜祇経母捺羅』等の三本を調査し翻刻して資料として付加している。これらは今までほとんど言及されておらず、台密の主に事相を研究する上で貴重な資料であり、これらが紹介されていることも評価に値する。欲をいえば相互補完した全体像を示し、瑜祇経法の実体を示してもらいたかったが、今後の課題として期待したい。

本論文には、上述したような問題の他にも、最澄の密教の特色や『三種悉地破地獄儀軌』の取り扱い等、さらなる吟味が必要な箇所がないわけではない。しかし、従来の研究を克明に再検討し、新たな視点から、台密の特色の一つである仏頂尊を、多角的に論じた成果は博士（仏教学）の学位を授与するのにふさわしい業績といえる。

今後は、仏頂尊と蘇悉地との関わりについての解明も重要な研究課題となるであろう。しかし、まずは仏頂系の密教について、見直しを含め、原典（経典や儀軌）から具体的に内容の検討をしていくこと、そして台密の特徴である蘇悉地部についても、新たな資料を発掘し検証していくことが課題であると考えます。

以上

公表予定

日程	平成 年 月 日
公表形態	①掲載誌名：【 】【 】号・巻 【 】頁 【全文・要約】
	②単著（発行者）
題目	<※タイトルを変更した場合>